

目 次

1. 関東甲信越ブロック協議会創立50周年記念誌 祝辞	
公益社団法人 日本理学療法士協会会長 齊 藤 秀 之	2
2. 日本理学療法士協会関東甲信越ブロック協議会創立50周年に寄せて	
日本理学療法士協会 関東甲信越ブロック協議会会長 公益社団法人 新潟県理学療法士会会長 佐 藤 成登志	4
3. 日本理学療法士協会関東甲信越ブロック協議会創立50周年に寄せて	
公益社団法人 茨城県理学療法士会会長 浅 川 育 世	6
一般社団法人 栃木県理学療法士会会長 南 雲 光 則	8
一般社団法人 群馬県理学療法士協会会長 渡 辺 真 樹	10
公益社団法人 埼玉県理学療法士会会長 南 本 浩 之	12
一般社団法人 千葉県理学療法士会会長 田 中 康 之	14
公益社団法人 東京都理学療法士協会会長 森 島 健	16
公益社団法人 神奈川県理学療法士会会長 内 田 賢 一	18
一般社団法人 山梨県理学療法士会会長 磯 野 賢	20
一般社団法人 長野県理学療法士会会長 佐 藤 博 之	22
4. 関東甲信越ブロック活動50年の歩み	
前史・昭和49年から昭和59年	24
昭和60年から平成 6 年	26
平成 7 年から平成16年	31
平成17年から平成26年	37
平成27年から令和 6 年	49
資 料	
1. 協議会会員・役員一覧	65
2. 関東甲信越ブロック協議会賞授賞者一覧	70
3. 会員数の変遷	72
4. 研修会の歩み	74
5. 学会の歩み	75
6. 学会表彰者	77
7. 会則・学会開催要項・運営申し合わせ事項	87



関東甲信越ブロック協議会創立50周年記念誌 祝 辞

公益社団法人 日本理学療法士協会
会 長 斉 藤 秀 之

関東甲信越ブロック協議会が創立50周年を迎えられましたこと、公益社団法人日本理学療法士協会を代表して心よりお祝い申し上げます。

昭和40年に理学療法士及び作業療法士法が制定され、翌年には第1回国家試験が行われました。その合格者110名が力を合わせて同年7月に日本理学療法士協会を設立し、10月には第1回日本理学療法士学会と第1回全国研修会を開催したことは、ご周知のことと思います。さて本会十周年誌に、昭和43年2月に「第3回関東地区集談会」が開催されたという記録がありました。本会創立と同時期から貴協議会の前進としての組織活動が開始されたことを改めて認識した次第です。1都9県で構成される最大のブロック協議会である貴協議会のルーツがここにあり、先達の驚異的なバイタリティーを引き継がれてきた歴代会長、役員、会員、関係者の皆様の並々ならぬご努力に深く敬意を表します。

1966(昭和41)年末時点の1都9県の理学療法士数は60名でした。設立当初から地域の医療・福祉・教育の発展に貢献し、その活動は多岐であったと伺っております。今日の2024(令和6)年3月末では42,171名の会員数を有する協議会となり、50年という長い歴史の中で、貴協議会は多くの困難を乗り越え、理学療法士の専門性を高めるための研修会や学会を積極的に開催し、会員の資質向上に努められています。これらの取り組みは、地域医療の質の向上に寄与し、地域住民の生活の質の向上にもつながっています。

一方、この50年の間に、日本の医療・福祉の環境は大きく変化しました。特に超高齢社会を迎えた今日において、理学療法士の役割は急性期・回復期・生活期までのシームレスなリハビリテーションの提供および地域包括ケアシステムの構築と急速に拡大しています。さらには健康寿命の延伸を目指した予防活動など、理学療法士に求められる使命は年々高まっています。そのような中で、貴協議会の皆様が地域医療において果たされてきた役割は、極めて重要なものであります。その活動は、今日私たちに強く求められている、理学療法士としての使命感と誇りを示されています。そして新たな地域医療構想が打ち出され、わが国の医療提供体制や社会保障制度は大きな変換期にきています。理学療法士の矜持や自律性が、今まで以上に問われてくるものと確信しています。私自身、貴協議会でお育ていただいた実感を強く持っております。新米会長であった小生を温かく、そして日本理学療法士協会におけるブロック協議会の理念を言葉と共に行動で示していただいた協議会内の先輩会長に刺激を受けたことを思い起こしています。今後も貴協議会には本会の進むべき方向を照らし続けていただくことを期待したいと思います。

さてブロック協議会は、地域の理学療法士の専門性向上、地域学術・研修活動の推進、学術活動と職能活動の連携強化、地域診断の向上、会員間の連携強化を通じて、地域医療の質の向上に寄与する重要な組織に発展したと思います。そして、本会や各士会と密接に連携し、全国的な方針や施策の地域への展開を担う側面もあろうかと考えます。このような状況の中で地域ごとのリソースや課題の違いから、活動の実施には調整や工夫が必要であることは言うまでもありません。すなわち、今後も地域のニーズに応じた柔軟な活動を展開し、理学療法士の専門性や社会的地位を高める役割が求められると思います。同時に、関係団体との関係づくりも期待したいと思います。

本会といたしましても、貴協議会と連携しながら、理学療法のさらなる発展と社会への貢献を目指してまいります。そのためにも、今後も貴協議会と共に、国民の健康と福祉に貢献するために組織力の強化、理学療法士の専門性向上と職域維持・拡大に向けた取り組みをともに進めていきたいと考えております。

50年という節目を迎え、これまでの歩みを振り返るとともに、次の50年に向けた新たな挑戦の始まりでもあります。地域に根差し、時代の変化に対応しながら、1都9県で構成される貴協議会のさらなる発展に向け、ますますのご活躍を心より祈念申し上げます。

結びに、関東甲信越ブロック協議会の創立50周年を祝し、50周年を機に、貴協議会が佐藤協議会長の強力なリーダーシップのもと、今後ますますご発展されること、ならびに貴協議会内会員の皆様の一層のご活躍とご健康を心より祈念いたします。



日本理学療法士協会 関東甲信越ブロック協議会 創立50周年に寄せて

日本理学療法士協会 関東甲信越ブロック協議会 会長
公益社団法人 新潟県理学療法士会 会長

佐藤 成登志

日本理学療法士協会 関東甲信越ブロック協議会が創立50周年を迎えられましたこと、心よりお祝い申し上げます。

本協議会は、全国8ブロック協議会の中で最も都道府県数が多い10都県で、43,000名を超える会員で構成されています。「理学療法士の人格、倫理及び学術技能を研鑽し、理学療法の普及向上を図ると共に、関東甲信越ブロックを構成する都県理学療法士会の親睦を図ること」を目的に謳っています。主な活動は、年に1回の関東甲信越ブロック理学療法士学会と年に2回の関東甲信越ブロック士会長会議の開催です。学会および士会長会議の担当は、10都県による輪番制で企画・運営を行っています。また、本協議会の会長および事務局も輪番制で、任期を2年としています。さらに、10都県間での情報共有と関連する課題を協議するために、生涯学習担当者会議、学会運営検討委員会、スポーツ関連事業運営委員会、働きやすい環境創り検討委員会を設けており、2024年度には記念誌作成のために記念事業委員会が加わりました。

私は、2015年に新潟県理学療法士会の会長を拝命させて頂き、同年に本協議会士会長会議に参加させて頂きました。当時は会長を交代する都県が複数あり、新任会長として多くの方々と交流をさせて頂きました。2023年～2024年には本協議会の会長を拝命させて頂き、事務局を新潟県理学療法士会に置かせて頂きました。士会長会議は2025年度11月の開催で102回目となります。構成員は10都県の士会長ですが、多岐に渡る情報共有と協議内容から、現在では会議への参加者が40名以上になっており、本協議会の重要性を感じております。

関東甲信越ブロック理学療法士学会は、2025年度11月に山梨県理学療法士会の担当で開催されますが、44回目の学会開催となります。2020年度から拡大し我々の生活に大きな影響を与えましたCOVID-19は、学会や会議等にも同様な影響を与えました。2020年度に茨城県理学療法士会が担当で行う予定であった当学会は、苦渋の決断のもとで中止となりました。担当県の方々の思いを考えますと改めて心が痛みます。2021年度は新潟県理学療法士会が担当をさせて頂きました。COVID-19の影響は続いており、開催ぎりぎりまで協議したことを思い出します。学会は、県内者限定の対面参加型と県外者を含めたりモート参加型を同時に行うハイブリッド形式で行いました。開催費用は予想以上にかかりましたが、本協議会から学会の新しい参加スタイルの提案ができたのではないかと考えております。現在、理学療法分野における学会は専門領域別に開催されており、中規模以上に位置する当学会は、総合的な理学療法学を研鑽するための大きな役割を担っていると考えます。特に若い世代の会員が、日頃の臨床内容を発表したり、早朝から夕方まで熱心に聴

講したり、議論したり、交流したりしている光景を見ると、当学会を継続していく必要性を感じます。

我々が対面している保健・医療・介護・福祉および産業における社会情勢は大きく変動を続けています。関東甲信越ブロック協議会は、50年に渡り10都県の結束のもとで確実に業績を築いてこられました。今後は今まで以上のご活躍を期待してやみません。

結びに、関東甲信越ブロック協議会の益々のご発展と、会員の皆様方のご健勝とご活躍を祈念いたしましてお祝いの言葉とさせていただきます。



日本理学療法士協会 関東甲信越ブロック協議会 創立50周年に寄せて

公益社団法人 茨城県理学療法士会
会 長 浅 川 育 世

私が茨城県理学療法士会の会長に就任したのは2018年のことです。前任の第9代斉藤秀之会長が日本理学療法士協会の業務に専念されることとなり、急遽ピンチヒッターを仰せつかりました。若いころから茨城県理学療法士会の業務に携わる機会をいただいておりますので、関東甲信越ブロック協議会の各種会議等にお邪魔させていただく機会もありました。ある程度協議会についての知識はありましたが、途中、茨城を離れたこともあり、改めて協議会の中心に入ることとなると私の知る各都県士会の会長の皆さんはすでに一線を退かれており、新たな体制、新たな業務、新たな課題と勉強することが沢山ありました。中でも2020年の第39回関東甲信越ブロック理学療法士学会は茨城が担当士会となっており、学会の準備を早急に進めなくてはならず、その時ばかりは斉藤前会長を恨めしく思いました。ご存じのように2019年12月に始まった新型コロナウイルス感染症は瞬く間に日本国内に拡大し、2020年4月には埼玉県、千葉県、東京都、神奈川県といった協議会の構成都県を含む7都県に緊急事態宣言が発出され、同年5月には全国の都道府県にまで緊急事態宣言が発出されるという想定外の状況に陥りました。何より都道府県をまたいでの移動は自粛するようにとの通達は学会の対面開催には致命的でした。そのような状態で学会の開催をこのまま進めるべきか、あるいはオンラインを含め学会の形式を変えるのか、あるいは中止の決断をすべきか大いに悩みました。当時の記録を振り返りますと、2020年1月の準備委員会では委員のメンバーはまだマスクは着用しておりませんでしたが、2月の後半になるとメンバー全員がマスクを着用しています。3月には学会のホームページが立ち上がりました。4月の準備委員会はオンラインで開催されおり、5月には中止が決定しています。緊急事態宣言の発出が決定的となったことがうかがえます。準備委員会で中止を決定し、協議会にお諮りした際には他のブロック士会長の皆さまよりお叱りを受けるのは当然と思っておりましたが、皆さん優しく、特に相談役の金子操先生からは「茨城はここまで準備したのだから学会としてカウントすべきでは」とのご助言をいただきましたことは、ただただ感謝しかありません。第49回関東甲信越ブロック理学療法士学会はまた茨城が担当士会を務めます。きっとその時は若い世代が素晴らしい学会を開催してくれることと思います。また、2021年11月には茨城県理学療法士会設立50周年記念式典を開催することができました。この頃も新型コロナウイルス感染症は収束の兆候が見えず、式典についても中止や延期も考えましたが、何とか無事に開催することができました。ブロック士会長の皆さまにはご臨席を賜りましたが十分なおもてなしもできず申し訳ない限りです。さて、茨城県士会もご多分に漏れず会員構成の中心は30歳代となります。この世代の会員は知識量も豊富で、働くこと、学ぶこと、何事にも非常

に貪欲である印象を持っています。若い世代の力が十分発揮できるようグランド整備を行うのが私たち世代の役目かと思っております。関東甲信越ブロック協議会として50年紡いできた軌跡は理学療法の歴史としてはまだ始まりの軌跡かもしれません。これから10年、20年、30年としっかりと道を切り拓く協議会であることを祈念します。これまで関東甲信越ブロック協議会の運営に携わってきた会員の皆さまに心から感謝申し上げるとともに、関東甲信越ブロック協議会の益々のご発展をお祈り申し上げます。創立50周年まことにめでとうございます。



日本理学療法士協会 関東甲信越ブロック協議会 創立50周年記念に寄せて

一般社団法人 栃木県理学療法士会
会 長 南 雲 光 則

このたび、関東甲信越ブロック協議会が創立50周年という大きな節目を迎えられましたこと、心よりお慶び申し上げます。半世紀にわたり理学療法の発展と、理学療法士の資質向上に寄与してこられたご功績に、深く敬意を表します。

理学療法士を取り巻く環境は、1960年代後半の制度整備の時代から、医療・介護・福祉の現場での役割の拡大、さらには地域包括ケアや予防分野への進出と、社会のニーズとともに大きく変化してまいりました。そのような中、関東甲信越ブロック協議会は、10都県の広域的な視点と強固な連携体制のもと、会員の研鑽と情報共有、そして各士会の活動支援という重要な役割を担い続けてこられました。

特に、今日のように人口構造が大きく変化し、医療と介護の連携が求められる時代においては、理学療法士が果たすべき使命もより多様化しています。疾病の治療や機能回復だけにとどまらず、生活の質（QOL）の向上や、地域住民の健康寿命の延伸、産後ケア、労働災害防止といった社会的要請に応えるべく、我々は常に専門性の深化と倫理観の涵養が求められております。

そのような時代において、関東甲信越という広域圏で、志を同じくする理学療法士が手を携え、課題を共有し、共に学び合う場を提供してきた協議会の存在意義は、非常に大きいものがあります。代々の士会長からバトンを受け、学会運営検討委員会、生涯学習担当者委員会、スポーツ関連事業運営委員会、働きやすい環境創り検討委員会などのブロック内における先進的取り組みの水平展開や、その活動の成果は多岐にわたります。

栃木県理学療法士会としては、昭和55年の第6回関東甲信越ブロック理学療法士研修会を最初に、平成1年（第8回）、平成11年（第18回）、平成20年の第27回（第10回アジア理学療法学会同時開催）、平成30年（第37回）に関東甲信越ブロック理学療法士学会を開催し、関東甲信越ブロックの皆様と共に多くの学びを得てまいりました。士会長会議や各種委員会での情報共有や意見交換、ブロック学会の開催などを通じ、士会の実情に応じた柔軟な対応力を養うことができたと感じております。特に、士会長会議後の懇親会や2次会は新米士会長としてはディープな大人の世界を垣間見ることができます。年々会議への参加者も増え、意見交換も活発になり、予定時間を超過することもしばしば、スパイスの効いた相談役からのご意見・ご指摘も楽しみな一つです。今後もその連携をさらに強固なものとし、各士会がそれぞれの特性を活かしながら活動することで、協会全体の発展へとつなげていけるよう、引き続き微力ではございますが尽力してまいります。

2025年に甲府市で第44回関東甲信越ブロック理学療法士学会が開催されます。2026年は横浜市、

2027年は長野市で予定しています。コロナ禍でのリモート開催や学会自体の延期・中止を経験したことで、あらためて対面開催での学会の醍醐味を味わっていただけたと思います。2028年には栃木県で開催する順番がきます。そろそろ準備しないと思いながら手付かずですが、10年前の経験を次世代に繋ぐことを考えて、士会員以上の理学療法士を迎える準備をしたいと思います。ちょっと足の延ばし、世界遺産の日光の社寺、陶芸の益子、那須・塩原・鬼怒川温泉に出かけるのもいいですし、LRTに乗車し近隣の散策もおススメです。学会会場での意見交換の続きは、しゃべり疲れた喉をビールで潤し、また、ジャズを聴きながらカクテルを傾けてはいかがでしょうか？ 関東平野の最北の地で皆様をお迎えします。

50年という歴史の重みは、これまで関わってこられた多くの諸先輩方の不断の努力と情熱の結晶であり、また、未来を切り拓く次世代への確かな礎でもあります。理学療法士を取り巻く環境がいかに変化しようとも、「地域に生き、地域とともに歩み、地域から必要とされる専門職」として、これからも地域から信頼される職能団体としての責任を果たして参りたいと思います。

結びに、関東甲信越ブロック協議会のこれまでのご尽力に改めて感謝を申し上げるとともに、今後ますますのご発展と、会員の皆様のご健勝とご多幸をお祈り申し上げ、寄稿の言葉とさせていただきます。



日本理学療法士協会 関東甲信越ブロック協議会 創立50周年に寄せて

一般社団法人 群馬県理学療法士協会
会 長 渡 辺 真 樹

日本理学療法士協会関東甲信越ブロック協議会（以下、「協議会」）が誕生してから半世紀が過ぎました。この間、諸先輩方のご尽力により発展を遂げてきたことに関して、心からの感謝と敬意を表したいと思います。今回、このような記念誌で執筆させていただく機会を頂きましたので、この50年の協議会の発展を振り返り、未来への展望を考える機会とさせていただければと思います。

まず、群馬県理学療法士協会（以下、「本会」）は、協議会が発足した昭和49年には存在しませんでした。本会が発足したのは昭和54年（初代会長：岸 正美氏）であり、その年に協議会に加入し、現在の1都9県の組織となっております。本会の発足時の会員数は9名です。その後、半世紀を経て会員数は約2400名となりました。おそらく他の都県も同様に会員数の急増となったと推測します。この50年間、急激な会員増や生涯学習制度の変化の中で、会則の目的にもある理学療法士の人格・倫理及び技能の発展、理学療法の普及向上のため様々な協議を重ね、多くの挑戦と今日の理学療法の発展に寄与されてきたことに驚歎しかありません。理学療法士は、専門職と言うまでもなく生涯学習が必要です。その生涯学習を全国規模ではなく、ブロック単位で情報共有しながら行うことには大きな意義があると感じています。今ではオンラインで全国の方と繋がることは可能ですが、近しいところでの顔の見える関係性作りは、今後も地域活動を活性化するのに重要であると考えます。

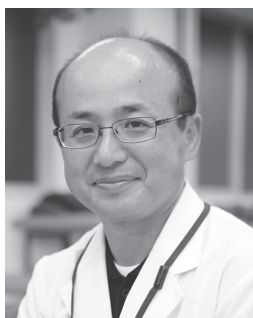
私自身は理学療法士として1年目の第16回学会（群馬県）で一般参加し、第18回学会（栃木県）では恩師の指導により演題発表もさせて頂きました。それ以降、協議会の学会が好きになり毎年参加させて頂いております。本会担当であった第28回、第38回では渉外局長を担当し、運営としても参加させて頂きました。学会準備は大変ではありますが、仲間との共同作業としての喜びを改めて感じる機会となりました。

令和5年に本会の第8代会長を拝命してからは、士会長会議にも出席させていただくことになりました。今までオブザーバーとしても出席したことはなかったため最初は堅苦しい会議なのかと緊張していたのですが、そんな不安はすぐに解消されました。議題は難しい内容もあるのですが、他の士会長をはじめ、オブザーバーとして参加されている各都県役員の方もとても親しみやすく、居心地の良い空間に変わったのです。そして様々な議論や意見交換から得られる情報が、会長1年目の私にとって、とても貴重な時間でもありました。そしてさらに居心地良く感じさせていただいたのは、懇親会です。「懇親会が一番重要な会議だ」と教えてくれた方がいて、本当にその通りだと感じました。普段士会運営をしている士会長や役員同士が、運営の難しさ、楽しさを共感する中で

の懇親会は、最高の盛り上がりを見せ、士気を高めることができます。親睦を深めることも会則の目的に明記されており、一番達成度が高いのではないかと感じたくらいです。今では年2回の懇親会が、とても楽しいイベントとなりました。

これから先50年を考えると、途中で高齢化社会は落ち着きを見せるかもしれませんが、急激な人口減少社会となります。そのような中でも、理学療法士が社会にどのように貢献できるか、常に考え対応していかなければなりません。関東甲信越ブロック学会は、それぞれ専門分野が分科会に移行した後、最大規模の総合的な学会として位置付けられています。一つの学会で幅広く学べる貴重な存在です。この存在意義を生かし、これからも将来を見据えた協議を重ね、発展していくことを切に願うとともに、自分にできることは精一杯努力する所存です。

会員の皆様には、今後も協議会に対して、変わらぬご指導、ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。50周年記念誌に寄せる挨拶とさせていただきます。



日本理学療法士協会 関東甲信越ブロック協議会 創立50周年に寄せて

公益社団法人 埼玉県理学療法士会
会 長 南 本 浩 之

日本理学療法士協会関東甲信越ブロック協議会が創立50周年を迎えたことは誠に慶賀の至りです。心よりお慶び申し上げます。

本協議会の50年の歩みの中では、多くの困難に直面し多くの波乱万丈な事象に遭遇したものと推察されます。先代の方々が、様々なことに立ち向かい乗り越えてきたご苦労があって50年を迎えられたものと察します。関わってこられた多くの方々の努力に心から敬意を表します。

私は、8年間この協議会の委員として活動をさせて頂きました。初めは緊張しどのような感じなんだろう、どんな人たちの集まりなんだろうと不安でいっぱいでした。委員の中に、学校の先輩や研修会で顔を合わせた方々などがいらっしゃり、初対面の方々も笑顔が多く、非常にやさしい方ばかりで、溶け込むのにそれほど時間もいりませんでした。一番は会議後の顔合わせの会が親交を深めた大きな要因だと思っています。そのような中、多くの方々と真剣に理学療法士の進化・深化について話をさせて頂き、多くの事を学ばせて頂きました。また、士会活動における苦労を共有したり、困ったことが有ったら助けて頂いたり、様々な情報交換が出来たのは私にとって非常に有意義な活動でした。改めて多くの方々に感謝申し上げます。任期中コロナ感染症の拡大により四苦八苦しながらも、多くの方々に支えられ活動を行えたことは大変嬉しく思っております。埼玉県理学療法士会も本協議会と同じような歩みで、2021年に50周年を迎えました。コロナの影響もあり2023年に第42回関東甲信越ブロック理学療法士学会とあわせ50周年式典を開催させていただきました。多くの協議会の方々にもご参列頂き盛会に終えることが出来ました。改めて感謝申し上げます。また、第42回関東甲信越ブロック理学療法士学会においては、学会長の任を務めさせていただきました。学会のテーマは「理学療法の普遍と創造、そして革新へ ～2050年の理学療法を考える～」とさせていただきました。理学療法の普遍性を基盤として、社会に貢献できる可能性を秘めた新しいアイデアを創造し、それを実現させる革新に繋げることが重要と思いテーマを設定しました。2050年に向かい理学療法の活躍の場が多様化し、大きな変革に迫られる時代が来ること予想し、様々な立場からの情報発信や活発な討論の場となることで、理学療法を盤石な体制へ進むべき道筋を考え、着実に歩みを進めるための推進力となる機会になればと考えた次第です。また、医療介護職の行動制限を考慮する必要や遠方や職場都合等で会場にお越し頂けない方々に参加しやすいよう、会場での対面開催とオンラインを利用したハイブリット形態で開催いたしました。この形態で学会を開催することが出来た結果、学会参加総数は、1,576名であり、多くの方にご参加を頂き、無事盛会裏に終えることができました。未来に向かい理学療法士が、社会に求められていることや専門

性について広い視点から考えることができ、今後理学療法が盤石な体制へ進むべき道筋に繋がる内容であったと感じました。これも、ご理解とご協力を頂きました埼玉県理学療法士会会員の皆様方をはじめ、関東甲信越ブロック協議会の皆様方に感謝を申し上げます。

あゆみは既にこれからの50年に向かっていきます。今後の超高齢化社会、少子化、生産年齢人口の減少など、理学療法士に求められる役割は格段に多くなることが予測されます。理学療法の役割が増大している実態と理学療法が必要なすべての人々にいきわたっていない状況が存在すると思っています。理学療法が必要な人々にいきわたるよう、政策立案者や施策立案者などの関係者への唱えが必要と思っています。関東甲信越ブロック協議会の組織力を強化し同じ方向に向かうことで影響力を持ち、理学療法士の社会的地位を高める戦略を実行することが可能と思います。同時に技術や知識のアップデートなど、広範囲の人材を育成する支援の仕組みを整える必要があると思っています。関東甲信越ブロック協議会の組織力が強化されれば、より有意義な会となると思っています。そうなることで、理学療法士が医療介護分野やそれ以外の様々な分野で、より一層社会に貢献ができるような盤石な体制を整えることが出来ると思っています。社会とともにさらに発展する理学療法士のため本拠協議会が益々の成長していくことを祈念いたします。



関東甲信越ブロック協議会 創立50周年に寄せて ～ 関ブロ愛 ～

一般社団法人 千葉県理学療法士会
会 長 田 中 康 之

公益社団法人日本理学療法士協会関東甲信越ブロック協議会（以下、関ブロ協議会）の創立50周年、誠におめでとうございます。理学療法士として32年間、そして千葉県士会長として12年間、この関ブロ協議会の一員として活動できたことは、私にとって大きな誇りであり、心より感謝申し上げます。

この節目にあたり、関ブロ協議会が果たしてきた役割と、私自身が関わる中で感じた魅力について改めて振り返り、皆様と共有させていただきたいと思います。

関ブロ協議会は、関東甲信越における理学療法士のネットワークの中核を担う重要な組織であり、その連携の強さと信頼関係の深さは全国に誇れるものです。

私は32年間千葉県士会一筋ですので他のブロックに所属した経験はありませんが、関ブロ協議会の十都県士会の会長・役員の関係性の良さは、全国でも随一だと確信しております。会議などだけでなく、日常的な連絡や相談の中で培われた信頼関係は、千葉県士会の運営に大きな安心感と前向きな推進力を与えてくれました。私にとって、日々の忙殺される中で関ブロ協議会の存在がどれだけ心の支えとなったかは計り知れません。関ブロ協議会は単なる連携組織ではなく、同志と語り合い、助け合える「仲間」の集まりでした。

印象深い出来事の一つは、令和5年5月に開催された千葉県理学療法士会の創立50周年記念式典・祝賀会です。関ブロ協議会の全士会長がご参加くださり、厳かな式典に続き行われた祝賀会では、関ブロ協議会の士会長のテーブルが、まさに「一番盛り上がっていた」と各方面から声をいただくほどの熱量でした。来賓の皆様からも「関ブロ協議会の士会長同士がここまで仲が良いのは素晴らしい。自分の団体では考えられない。理学療法士会の強さを感じた」と高い評価をいただきました。

さらに、令和6年10月に開催された「第43回関東甲信越ブロック理学療法士学会・第30回千葉県理学療法学会合同大会」の開催も忘れられません。1600名を超える参加者を迎えたこの大会では、「各士会長が本音で語る！ 士会の未来！」と題したシンポジウムを実施し、現場のリアルな声と将来への展望が語られました。ライブ感あふれるステージ上のやりとりに、多くの参加者が共感し、士会活動への意欲が高まったとの声を多数いただきました。士会長たちの“熱さと思い”が参加者に伝わったものと確信しております。

このような経験を通じて、関ブロ協議会が単なる連携組織を超えて、理学療法士同士が思いを共有し、高め合う場であると実感しております。私はこの6月末をもって千葉県士会長を退任いたし

ますが、関ブロで築かれた人とのつながり、得られた学び、そして活動の中で感じた皆さんの熱意は、今後の人生においてもかけがえのない宝物となることでしょう。

退任を決めた際、最も寂しく思ったのは、関ブロ協議会の士会長の皆様との交流が減ることでした。けれども、次の世代にこの熱量と絆を受け継いでもらえるよう後押しすることがこれからの私の役割であると感じています。理学療法士としての専門性を高めるとともに、人とのつながりを大切にする関ブロ協議会の“熱さ”が、これからも変わらず続いていくことを心から祈っております。

最後になりますが、私の地元・千葉県佐倉市出身の野球界のレジェンド、長嶋茂雄氏の名言を借りて締めくくらせていただきます。「関ブロ協議会は永久に不滅です」。

本稿をお読みくださった皆様が、今後も関ブロとともに歩み、共にその未来を築いていかれることを、心より願っております。



日本理学療法士協会 関東甲信越ブロック協議会 創立50周年に寄せて

公益社団法人 東京都理学療法士協会
会 長 森 島 健

東京都理学療法士協会会長、そして関東甲信越ブロック協議会（以下、本協議会）の役員を務めさせていただいております森島健です。このたび、本協議会50周年という記念すべき節目の年を迎え、記念誌発刊にあたり寄稿の機会を頂戴いたしましたことを、心より光栄に存じます。

私が東京都の会長として本協議会に参加させていただいてから、早くも10年の歳月が流れました。この10年を振り返ると、本当に多くの思い出が胸に去来します。初めて本協議会の士会長会議に出席した日のことは、今も鮮明に記憶しております。各都県の士会長の皆様が、新参者である私を温かく、そして心から歓迎してくださったこと。その和やかな雰囲気は、本協議会が持つ「仲の良さ」と「強い絆」を象徴するものでした。そして、会議を重ねるごとに、その絆の深さを実感し、今日まで共に活動できたことを、心から嬉しく思っております。時に真剣に議論を交わし、時に和やかに談笑する中で育まれた人間関係は、私にとってかけがえのない財産です。地域や都道府県は異なっても、理学療法の発展という共通の使命のもと、互いに支え合い、高め合える仲間がいることの心強さを、この10年間で深く実感してまいりました。

この10年間、私は「スポーツ関連事業運営委員会」の委員長として活動してまいりました。着任当初、スポーツ領域における理学療法の活動は、個々の理学療法士とアスリートの関係性が主であり、個々の理学療法士の情熱に依存している部分が大きかったように記憶しています。そのため、都県士会や本協議会として関わる事業は非常に限られており、組織的なサポート体制や、地域全体でスポーツ活動を支える仕組みは、まだ発展途上であったように思います。しかし、この10年で状況は劇的に変化しました。スポーツ領域における理学療法の重要性が広く認識され、各都県との連携を強化した結果、現在では各都県において積極的にスポーツ関連事業が展開されています。たとえば、地域の子どもたちを対象としたスポーツ障害予防教室、アスリートのパフォーマンス向上を目的としたセミナー、地域スポーツイベントへの理学療法ブース出展など、多岐にわたる事業が各地域で展開されています。各都県士会が主導することで、あらゆる年齢層の住民やアスリートに理学療法へのアクセスを十分に提供できるようになり、その成果は着実に現れています。今では、どの都県においてもスポーツ関連事業が主要な活動の一つとして成長を遂げており、その発展にわずかながらも関わることができたことを、誇らしく感じております。これは、スポーツ分野における理学療法士の専門性と必要性が、社会により広く認知されてきた証とも言えるでしょう。さらに、特筆すべきは、パラスポーツの普及活動にも微力ながらも関わってきたことです。10年前はまだ黎明期にあり、理学療法士の関わりも限定的でしたが、この10年で各都県の重要な事業の一つとして、

少しずつ成長を遂げていることを嬉しく思っています。障がいのあるアスリートへのサポートの重要性を共有し、共に活動の場を広げてきたことは、私にとって大きな喜びであり、理学療法士が社会に貢献できる領域の広がりを実感する機会となりました。これもひとえに、ブロック内の各都県が連携し、互いに協力し合ってきた賜物であり、50年という長きにわたり培われてきた本協議会の歴史と、諸先輩方のたゆまぬご尽力の上に、私たちの活動が成り立っていることを、改めて深く実感し、心より感謝申し上げます。こうした強固な基盤があったからこそ、新しい挑戦も実を結ぶことができたのだと思っております。

これからも本協議会が理学療法士の発展に貢献し、地域医療の一翼を担い続けることを、心より祈念いたします。そして、この温かく強固な絆が、次の10年、さらには50年へと受け継がれ、多くの理学療法士が活躍できる場を提供し続けることを願ってやみません。50周年という大きな節目を迎えた今、本記念誌が、未来への新たな一歩となることを期待しております。



関東甲信越ブロック協議会50周年記念誌 発刊に寄せて

公益社団法人 神奈川県理学療法士会
会 長 内 田 賢 一

このたび、日本理学療法士協会関東甲信越ブロック協議会（以下、本協議会）が創立50周年を迎えられましたことを心よりお喜び申し上げます。私は、令和3年6月に神奈川県士会の会長に就任し、同年より本協議会のメンバーに加えさせていただきました。それから4年間、微力ながら本協議会の仕事に関わらせていただきました。昭和49年度に本協議会が関東ブロック協議会という名で創立してから50年という長い歴史の間に、多くの職責を果たし、たゆまぬご努力によって本協議会を飛躍・発展させてこられた先達の皆さまには敬意を表するとともに、心より感謝申し上げます。そして、本協議会の佐藤成登志会長と山梨県理学療法士会の磯野賢会長を中心にこれまでの50年間の歩みを振り返り、次の時代へのさらなる飛躍を目指して記念誌を発刊されますことは、大変感慨深いものがあります。

私が本協議会と本格的に関わり始めたのは、平成22年度に神奈川県理学療法士会の生涯学習部長に就任してからでした。本協議会には複数の常設委員会があり、そのうちの1つである生涯学習担当者委員会に関わらせていただきました。当時は、日本理学療法士協会が主導する生涯学習制度を、新制度に改定するための作業が始まったばかりの頃でした。日本理学療法士協会からも委員の方が複数名出席しており、当委員会を通じて新制度の草案に対する問題点や対応策について、会議の場で幾度となく提案をさせていただきました。当時の日本理学療法士協会の担当者の方には随分と無理難題をお願いしてきましたが、本協議会のメンバーの思いを汲んでいただき、新制度において我々の考えを一部反映させていただけたことは、大変有意義な時間だったと思います。

また、私は令和5年6月に、本協議会の常設委員会「働きやすい環境創り検討委員会」の委員長を拝命いたしました。この委員会は、平成22年（2010年）に有志で立ち上がった「女性理学療法士の会」が始まりであり、平成25年（2013年）に本協議会で第1回目の情報交換会が開催されました。その後、女性特有のことに限らず、働き方について各都県の取り組みについて情報交換を積み重ね、平成31年（2019年）に本協議会の常設委員会となりました。今後は、副委員長の渡辺真樹群馬県士会長に多大なサポートをしていただきながら、本協議会の会員の皆さまが置かれている職場環境や賃金など、理学療法士が置かれている労働環境に焦点を当て、今まで以上に各県の取り組みを共有していきたいと考えています。

本協議会は、昭和49年（1974年）10月に設立され、翌年の昭和50年（1975年）9月に第1回関東ブロック士会長連絡協議会総会が開催されました。その第1回総会にて、神奈川県士会の第2代会長である谷島朝生先生が初代会長となりました。現在、私が神奈川県士会の第10代会長なので、時

の流れを感じます。本協議会は、設立当初より都県士会持ち回りで関東甲信越ブロック理学療法士学会が開催されています。神奈川県士会が担当した学会は、昭和62年（1987年）の第6回学会、平成8年（1996年）の第15回学会、平成18年（2006年）の第25回学会、そして平成28年（2016年）の第35回学会の計4回です。そして令和8年（2026年）10月には、「理学療法を楽しんでいますか？—後進につなぐ理学療法士の未来—」をテーマに、第45回学会を神奈川県士会が担当して開催する予定です。現在、鈴川仁人準備委員長を中心に、鋭意準備を進めているところです。理学療法士の未来を後進に託してゆくためにも、盛大に執り行いたいと考えています。

現在、この原稿を執筆している令和7年度には、本協議会を構成している複数の都県士会で会長が退任され、次代に向けて新たな士会長が誕生する予定だと聞いております。50周年を機に新たな息吹が本協議会に吹き込まれることになり、本協議会もより活性化することが期待されます。我々理学療法士の職域保全・拡大に向けて、本協議会から新たな理学療法士の働き方を提案するとともに創造していきたいと考えています。

最後になりますが、50周年の節目にあたり本協議会の益々のご発展をご祈念いたしましてお祝いの言葉とさせていただきます。



日本理学療法士協会 関東甲信越ブロック協議会 創立50周年に寄せて

一般社団法人 山梨県理学療法士会
会 長 磯 野 賢

このたび、日本理学療法士協会 関東甲信越ブロック協議会が創立50周年という大きな節目を迎えられましたこと、心よりお慶び申し上げます。また、創設以来半世紀にわたり、バトンをつなぎ、本協議会の礎を築き、理学療法の発展に尽力され、支えてこられた歴代の役員、会員、関係者の皆様に、深く敬意を表するとともに、感謝申し上げます。創設当初の時代背景を想像しますと理学療法士という職種がまだ社会に広く認知されていなかった時代から、今日に至るまでの道のりは、まさに先人の皆様の不断努力と情熱の積み重ねの賜物であります。また、会員数が増大し、ニーズの多様化、事業が拡大する中でも、しっかりと患者・利用者の生活に寄り添い、信頼を得てきた活動の積み重ねが、現在の社会的評価へとつながっていることを改めて実感しております。

関東甲信越ブロック協議会は、10の都県士会が連携する広域的な組織であり、このネットワークは、情報や経験の共有、人的交流を通じて、多様な課題への柔軟な対応を可能とする貴重な資源です。とりわけ、若手理学療法士の育成や、次世代リーダーの登用においても、ブロック内での連携と支援が大きな意味を持つものと確信しております。私自身は令和3年に山梨県理学療法士会会長となりましたタイミングから、協議会の会議に参加させていただいております。右も左も分からない新人会長を温かく迎え入れ仲間に加えていただいたこと感謝しております。また、ブロックとしての方向性の検討に留まらず、各士会の運営における課題や工夫につきましても共有出来たことは大きな財産となりました。そして、共通の課題解決、情報共有のために専門委員会を立ち上げ、活動してきたことは大きな発展につながったものと考えます。そして、このネットワークのなかで当士会の課題を投げかけますと皆さんからアドバイスをいただけますことは何物にも代えがたいものとなっております。

勿論、私のみならず山梨県理学療法士会としましても、ブロックの一員として、各都県士会が担当となり開催される学会や当士会担当開催での学会においては、これまで多くの学びと経験をいただけてまいりました。特に、山梨で過去に開催された学会では、他県の士会との多大な協力のもと、充実した学びと交流の場を創出できたことは、当会にとって非常に大きな財産となっております。準備段階では多くの課題にも直面しましたが、他県の皆様の温かい支援と専門的な知見に支えられ、大会を成功に導くことができました。この経験は、会員にとって今なお忘れがたい学びの機会として語り継がれています。

そして本年、私たち山梨県理学療法士会は、第44回関東甲信越ブロック理学療法士学会を山梨の地で開催させていただくこととなりました。創立50周年という記念すべき年にこのような重要な機

会を賜りましたことは、誠に光栄であると同時に、大きな責任を感じております。本大会では、「今いる場所とその先の未来へ ～新時代を生きる理学療法～」をテーマに掲げております。まさにこの節目に当たって、私たちがこれまで歩んできた道を振り返るとともに、現在の立ち位置を再確認し、その上で未来へとつながる新たな一步を踏み出す場としたいと考えます。地域包括ケアシステムの深化、医療・介護連携の重要性の高まり、さらにはAIやICTといった新技術の導入による業務変革など、私たち理学療法士には、これまで以上に広範な視野と柔軟な対応力が求められています。専門的知識・技術にとどまらず、人と人との関係性の中で信頼を築く力、多様な職種と協働しながら課題解決を図る力、そして地域に根ざした専門職としての使命感が、今後の理学療法士に不可欠となることでしょう。新時代につながる理学療法を発信共有できます機会となりますよう取り組んで参ります。また、このような10年ごとの大イベントは、山梨県理学療法士会におきましても、会員同士の新たなつながりを生み、結束力を高め、次の世代を担う会員の飛躍の場となっています。今回も是非そのような学会となるよう力を合わせ進めてまいります。

改めまして、本協議会の50年にわたる歩みに深い敬意を表するとともに、今後のさらなるご発展と、関係者の皆様のご健勝・ご多幸を心よりお祈り申し上げます。



日本理学療法士協会 関東甲信越ブロック協議会 創立50周年に寄せて

一般社団法人 長野県理学療法士会
会 長 佐 藤 博 之

このたび、日本理学療法士協会 関東甲信越ブロック協議会が創立50周年という節目を迎えられましたことを、長野県理学療法士会を代表し、心よりお祝い申し上げます。また、長年にわたり本協議会の発展にご尽力された諸先輩方ならびに関係者の皆様に、深く敬意と感謝を申し上げます。

関東甲信越ブロック協議会は、関東一都六県と甲信越三県をつなぐ広域連携の中核として、地域の実情に即した課題共有と実践を支えてまいりました。各県士会が互いに支え合い、共に学び合うこの連携体制は、理学療法士の専門性と社会的価値の向上に大きく寄与してきたものと確信しております。とりわけ、関東甲信越ブロック学会の開催を通じて、地域ごとの臨床実践に根ざした研究成果や取り組みを発表し合い、学術の向上に貢献してきたことは、本ブロックの大きな特色であり強みの一つであると思います。

この10年を振り返ってみますと、私たちはかつてない社会的変化に直面しました。新型コロナウイルス感染症の世界的パンデミックは、医療・介護現場の在り方を一変させるとともに、理学療法士としての働き方や人との関わり方についても、あらためて深く問い直す契機となりました。この困難な状況を通して、人と人とのつながりの尊さや、対面による関係性の大切さを強く実感すると同時に、支援の形そのものを柔軟に見直していく必要性を学びました。

また、日本各地で頻発する自然災害も私たちに大きな課題を突きつけています。長野県においても、2019年の台風19号による災害は甚大な被害をもたらしました。特に長野市において発生した水害では、当会として初めてとなる大規模な災害支援活動を経験することとなりました。右も左も分からない中で、関東甲信越ブロックをはじめとする他県士会の皆様のご支援を賜りながら、リハビリテーション専門職として避難所や被災地域での支援を行うことができました。この経験は、長野県士会にとって大きな財産であり、災害時における理学療法士の役割と備えの重要性を身をもって学ぶ機会となりました。

加えて、長野県理学療法士会ではスポーツサポート分野にも積極的に取り組んでまいりました。冬季スポーツが盛んな地域として、競技者の障害予防やリハビリ支援、各種大会での医療サポートなどに関わる中で、理学療法士の専門性が競技現場においても強く求められるようになっていきます。この分野においても、関東甲信越ブロック内での情報交換や人材交流が進み、他県士会と連携しながら、スポーツ現場における支援体制の質的向上にも取り組んでいきます。

今後、ますます進行する少子高齢社会において、私たちは「2025年問題」、さらに深刻な「2040年問題」と向き合っていくことになります。急速な高齢化や支え手不足、多死社会への対応が求め

られる中で、理学療法士には、単なる機能回復支援にとどまらず、生活支援、介護予防、地域包括ケアの実現に向けた多職種連携の中核的存在としての役割が期待されています。

今後10年においては、リニア中央新幹線の開通により、首都圏と長野県のアクセスが格段に向上することで、医療・介護人材の流動性や地域間連携が一層促進されることが予想されます。このような社会構造やインフラの変化に適応していくためにも、関東甲信越ブロック協議会による広域的な情報共有と連携体制の維持・強化は、ますます重要になっていくと思われます。

私たち長野県理学療法士会も、地域に根差した支援活動を大切にしながら、これからの時代にふさわしい理学療法のあり方を模索し続けてまいります。そして、関東甲信越ブロックという心強いネットワークの中で、互いに知見と経験を分かち合いながら、確かな歩みを重ねていきたいと思えます。

結びに、創立50周年という大きな節目を迎えられた関東甲信越ブロック協議会のこれまでのご功績に深く敬意を表しますとともに、本記念誌の発刊にご尽力いただいた関係各位に心より感謝いたします。

今後とも、理学療法士が社会から信頼され、必要とされる存在であり続けられるよう、関東甲信越ブロック協議会および会員の皆様の更なる発展を祈念し、ご挨拶とさせていただきます。